



# 明治大学SF研究会・OBの部屋

## MSFC2018

50周年記念大会を  
成功させよう！



ここではSF本について熱く語りましょう

NEW

### 私の好きなSF作家、フレデリック・ブラウン

川瀬 広保

2017/06/12



- ＝更新履歴＝
- 6月12日 「本棚」を更新
- 6月12日 「会員だより」を更新
- 6月5日 「50周年」を削除
- 6月2日 「本棚」を更新
- 5月31日 「TERRA」を更新
- 5月30日 「思い出話」を更新
- 5月27日 「本棚」を更新
- 5月25日 「本棚」を更新

2017年6月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	



[明治大学SF研究会公式ホームページ](#)

#### 「ミミズ天使」

前回、エドモンド・ハミルトンが私にとって、4位のSF作家だと書いたが、順位はともかく次は何と言っても、フレデリック・ブラウンだ。奇想天外なアイデア・ストーリーが多く読みだしたら、やめられない作家であることは間違いない。

数多くの作品の中で、「ミミズ天使」を読んだときは、「こんな人を食べた話があるのだろうか」という印象だった。天界の植字工のミスで、anglewormと書くべきところを、anglewormと綴りを間違えた結果だったというオチにはうならされた。たった一文字の天界のミスが、この世に影響を与えたのである。われわれのこの地上界のさまざまな不幸も何かこのような些細でも、重大なミスの結果ではないかと、再読すると思ってしまう。

星新一がブラウンに多大な影響を受け、唯一の翻訳作品が、このブラウンの「さあ、気違いになりなさい」だったというの、わかるような気がする。

#### 「おしまい」

もう一つ、強い印象を持つ作品がわずか9行で成る「おしまい」(原題The End)である。「未来世界から来た男」に収められている。時間が逆行すると文も逆になる！読めばわかるがこんな楽しいというか、人を食べたというか、どんな長編時間SFにも負けないというショートショートで実に面白い。

#### 「73光年の妖怪」

これも楽しく、夢中になって読んだものだ。ブラウンは長編も得意で、シリアスなものもあるが、この作品は、とにかく読んでいてハラハラドキドキさせられる傑作である。原題のThe mind thingと人間の戦いである。原題は、「こころのもの」とか「精神物体」と訳せるが、目に見えない相手との攻防がすごい。

ブラウンは発想とストーリーテリングが素晴らしいのだ。

SFというのは、奇想天外な発想のだれも考えような作品が楽しい。そんなことをまた考えさせられた。今回は、3作だけ振り返ってみたが、このブラウンについては、また続かも。



### 記憶に残る、この一冊『SFマガジン53号』

川瀬 広保

2017/06/02



私がSFファンになったのは、SFマガジン第53号からと言ってもいい。高校1年のころだったと思う。それまでは、〈少女少女宇宙科学冒険全集〉などというものを読んでいた。SFという語はまだなかった。「地球のさいご」「火星救助隊」「宇宙の征服者」などである。日本人作家では、瀬川昌男「白鳥座61番星」を愛読していた。同じ著書の「火星に咲く花」は読んでいない。この本を読んだ人に比べて、このへんに世代の差を感じる。

そんな時代に、新聞で福島正実と荒正人の紙上討論が載った。その記事の最後に、「SFマガジン編集長」とあった。それで、私はこの世に「SFマガジン」という雑誌が存在していることを初めて知った。そこで、浜松にある谷島屋書店に出向いた。

そこに、SFマガジン(53号)が確かに陳列されていたのだ！！

そこには、今思うと次のような作品が、きら星のようにならんでいた。

- アイザック・アシモフ 夜来る
- 小松左京 自然の呼ぶ声
- フィリップ・ホセ・ファーマー 進めや進め！
- ポール・アンダースン シルチスの決闘
- ジョン・ウインダム 時間錯誤
- グレブ・アンフィロフ 私と私でない私
- ピーター・カーター もや
- 広瀬正 異聞風来山人
- 星新一 夢魔の標的(第四回)
- 手塚治虫 SFファンシー・フリー <最終回> 昨日と明日の私
- アーサー・C・クラーク 連載特別コラム 未来のプロフィール <5>

53号以前の号もある人からもらったので書庫に眠っている。創刊号ももらった。このことから、星新一、小松左京、アーサー・C・クラークなどの名前を知った。あれから、50年余、SFマガジンは700号を超えている。もし、記憶に残るSF関係の本を何冊か挙げよと言われれば、私の場合、この「SFマガジン53号」は必ず入れなくてはならない。思い出多い一冊である。



## お勧め、この一冊

### アーサー・C・クラーク『未来のプロフィール』

川瀬 広保

2017/05/27



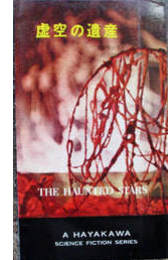
クラークは優れたSF作家だが、同時に優れた科学エッセイストでもある。この『未来のプロフィール』こそ、そのことを証明している。透明人間を科学的に考証してみたり、今後の未来を予測してみたりと、ただの想像・空想ではなく、科学に裏打ちされ、十分にありうる未来を探している。「高名な科学者がそんなことは起こらないと言えば、ほとんど間違っている」「十分に発達した科学は魔法と見分けがつかない」というような名言を数多く遺した。クラークは知性の作家であり、ペダントリーに富んでいる。どこにどんな比喻・格言などが隠されているかわからないと誰かが言っていた。この本の末尾に実現しそうなクラークによる未来地図が載っている。確かその最後には、人類は地球外生命に2100年ごろ遭遇するだろうと予測していた。クラーク自身、これを真に受けてもらってはこまると言っていたが、晩年、宇宙人に会ってみたいと言っていたり、もっと前には、彼はスーパーナチュラルなものをかなり信じていたりしたようだ。最もよく発達した知性は、争いなどをしないものになると楽観的に信じていた。クラーク自身が何かでそのように述べていた。宇宙人を探す本格的な計画が始まっていると科学雑誌「ニュートン」の最新号に載っている。クラークの想像した宇宙人との出会いは、彼が予想した時期より早く実現するかもしれない。ノーベル平和賞にノミネートされ、宇宙エレベーターを構想し、その実現への実験がもうテレビのニュースで取り上げられるようになってきた。sirの称号を持つクラークが早くに書いたこの科学エッセイ集は万人にお勧めの一冊である。



## 私の好きなE・ハミルトンの作品

川瀬 広保

2017/05/24



好きな外国人SF作家を挙げよと言われたら、クラーク、アシモフ、ハインラインをまず挙げたあと、私の場合、4位になるのが、ハミルトンだ。もうかなり年月がたってしまったし、スペース・オペラが多いのだが、次の四作はいつまでたっても色あせない。それほど、最初に読んだときは強く印象に残り、今でも心に残っている。

### 「フェッセンデンの宇宙」

この宇宙は、実はフェッセンデンという男が実験によって作ったものだったというこれぞSFという奇想アイデアを本当らしく描いている。「あの高みにフェッセンデンがいるのだろうか」というラストの言葉が印象に残っている。惑星も恒星も星雲もそこに住む生命もみんな作られたものだったというSFの中のSFと言える奇想であり、これが本当のSFだと思ったものである。その時の印象が強く、今でも私にとって、これは常に上位にくる傑作短編SFである。

### 「反対進化」

この世界は、進化の結果ではなく、退化の果てだったという逆説を描いて、奇想を好むわれわれSFファン、いや、一般読者にも大いに受ける傑作である。進化だと思っていたのは、退化だったというわけである。そういえば、争いばかりしているし、便利になればなるほど、混沌とした問題の多い世の中になっているのは、「退化」なのかもしれないと本当に思ってしまう。80年ぐらい前に書かれた作品だが、まだまだ考えさせる真理を含んでいるように思う。

### 「虚空の遺産」(the haunted star)

原題に比べ、抽象的な日本語のタイトルが、昔、かなり気になって、ハミルトンの名前を知り始めた。ハミルトンは大きく分けると、スペース・オペラと、シリアスな内容の作品の二つに区分され、これは後者である。だいぶ古いし、もう再版されていないようだし、私自身、書庫のどこかに眠らせているのだが、いつまでも心に残っているタイトルである。

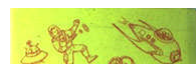
### 「プロ」

SF作家の息子がロケットに乗って、月へ行くことになった。いよいよロケットの発射というときになって、発射は問題なく成功するのだが、その息子の偉業を見ながら、父親はSF作家として「こんな状況は何回も書いてきた・・・と自分の心を鎮めようとする。宇宙飛行士として、プロになった息子の成功を素直に喜びたいという気持ちと、「おれはSF作家じゃないか、今までにたくさんこのように話を書いてきたのだ」というプライド・矜持・自負の念がうまく描かれていて、ラストの言葉が父親の心の奥をのぞかせる。この作家はただのアイデア・ストーリーを書きだけの作家ではないということがよくわかる作品である。

これは、もう50年も昔に書かれたが、まだ読まれ続けるのは、SF作家として描いていた物語が、自分の息子によって実現するというこの物語の発想自体がユニークだからであろう。エドモンド・ハミルトンはいいなあ。



## アーサー・C・クラーク自伝、楽園の日々





SF作家に限らず、人はみな自伝を書きたがるものだが、どうしてこう有名なSF作家の書いた自伝は興味をひくのだろう。特に「SFの神様」とも言われたクラークの自伝だとわかったときは、これは絶対読まなくてはと思ったものだ。

Astounding daysとは、クラークがそのころ愛読していたSF雑誌名であって、直訳すれば、仰天する日々となろうか。クラークはクラークらしくて、私事はあまり書いていない。そこへいくと、アシモフの場合は、『アシモフの自伝』の中で、自分が尿管結石になったとか、妻の分の食事まで食べてしまったなどと誠実に、実に詳細に書いている。

いずれも、いわゆるサクセスストーリーである。昔、「トキワ荘」に集まった若き漫画家たちにも成功した人と、やめていった人が『まんが道』や『愛……知りそめし頃に……』に描かれていたが、こちらは自らが書いた自伝である。初め、クラークはこの本のタイトルを『つましい天才』とでもしておきましょうかと言っていたそうだから、この本にも独特のユーモアが含まれている。

クラークは最初から、完成していた人物だ。努力の時代というものがない、初めから傑作を多く書いていた。こういう人は天賦の才能を持っていたと言うべきであろう。

クラークは言う。「私は、故郷のメインヘッドより、月の方をよく知るようになった」。この一文から、望遠鏡で月面を観察している少年クラークを想像してしまう。後に、エッセイを一冊にまとめた彼の本に、そのように述べられていたことを思い出す。

この自伝にも、そのことが触れられていた。クラークは天文少年だった。この本は1989年に書かれたようだから、もう28年も昔に出版されたので、たぶん今では、あまり手に入らないのではないかと思う。

本書は全体が4部から成り立っており、ベイツ、トレメイン、キャンベルという歴代の編集者の名前になっていて、終章はアナログというSF雑誌名だ。アスタウンディングという雑誌名が変わったということである。

最後は、『記世創』sisineGというわずから行の冗談と本気ともれない逆説？で締めくくられている。言葉遊びもどとれるが、「読者からの手紙」でもクラークは読者を煙に巻くために？一種の言葉遊びまたはユーモアを書いていたから、クラーク独特の終わり方で印象に残っている。

この本は密度が濃いので、簡単には評せない。この辺で、いったん終りにしよう。続きがあるかも。



## 私が好きな小松左京の作品

川瀬 広保

2017/05/16



昔、SFマガジン53号に「自然の呼ぶ声」という短編が載っていた。小松左京の作品である。確かこの作品から、私は小松左京のファンになったと記憶している。

「ご先祖様万歳」

ストーリーテリングの鮮やかさは、初期の作品から、群を抜いていた。あまりにも話がリアルだったので、当時編集者をして石川喬司さんのところに、読者から「あれはどこであった話か？」という手紙が来たというエピソードを何かで読んだ。

「影が重なる時」

このタイトルも実に懐かしい。影とは原爆以上の巨大な爆発で時空間が曲がって、すべてのものが重なってしまい、〈幽霊〉としてあちこちに出没ようになったという何かありえそうな怖い話であり、傑作である。

「ゴエモンのニッポン日記」

この作品ほど、小説の形をとりながら、痛快に文明批評をしている著作を知らない。ゴエモンと名の宇宙人が主人公(どちらが主人公かわからない)に居候して、あれこれこの日本を鋭く批評していく。

「お召し」

確か、ある日突然12歳以下の子どものみになってしまったという世界を思考実験している。それも古代文書から、明らかにっていくというストーリーテリングの鮮やかさで、印象に残っている。

「コップ一杯の戦争」

わずか2〜3ページだが、飲み屋でちょっと飲んでるうちに、核戦争が起こり、掃るころにはもうすでに終わってしまっていたという奇妙な味わいを残すショートショートである。そのころから、小松左京は未来を見据えていた。今の世界もそうなるかわからない。重いテーマを軽いタッチで書いていて傑作だ。

「骨」

この作品も実に深いテーマを持っている。井戸を掘ろうとしたら、深く掘れば掘るほど、地層に埋まった骨が新しくなっていくという考えさせられる重いホラー小説である。

さて、小松左京が亡くなって、偲ぶ会が行われたときに、それに参加したことがある。まわりはみんな作家、翻訳家、出版社などのプロがほとんどだったので、ちょっと気がひけたがそれだけ人気があり、慕われていたということである。この偲ぶ会は、新聞のニュースにもなった。

小松左京は、晩年、うつ病になってしまった。NHKのクローズアップ現代に、今までに唯一取り上げられたことのあるSF作家であった。石川喬司さんが涙ながらに語っていたのが、印象的である。小松左京は、大きな作家である。取り扱うテーマが大きく、その語り口は鮮やかだった。

星新一なら、タイトルそのものがすでに、SFだった。いわく、悪魔のいる天国、マイ国家、妖精配給会社、きまぐれロボット、未来いそっぶ等々。小松左京の場合は、果てなく話がひろがっていき、ほとんどが壮大な長編になる。そして、テーマ自体が大きい。

クラークも星新一も小松左京もそれぞれ特徴があって、優れた作品が多く、一度に語り切れない。思いついたものだけについて書いてみた。

機会があったら、また。



## 私が好きな星新一の作品

川瀬 広保

2017/05/11



昔、私はSFマガジンを53号から買い始めた。その号には、星新一の『夢魔の標的』が連載されていた。後の数多くのショートショートより、何か愛着がある。以前、星新一が浜松へ来られたとき、出席者のひとりひとりが氏に何か要望を直接述べたとき、私は

「もっと『夢魔の標的』のような長編を書いてください」と言ったことがある。ショートショートの様にもっと長編を書くと書いたのだから外れだったかもしれない。だが、本人はニコニコして聞いていた。  
さて、ショートショートとして、私のお気に入りのタイトルをあげてみる。

「あーん。あーん」

これは不思議な読後感をもたらす。何か教訓が含まれているような、ただ面白く書かれているだけのような子供向けの作品である。

「最高のぜいたく」

主人公は、友人から誘いが来たので、そのお宅へ出かけていくと、暑いところなのに、部屋では暖房をしている。今度は、暑すぎて、冷房にするというような内容で、ラストの「最高のぜいたくとはこういうものかもしれない」という主人公のセリフがぼんやり決まっていた。

「殉教」

これは、子ども向けとは言えない。話に深みがあり、何回も読みなおした。生きる意味を考えてしまう。もしかしら、星新一ショートショート1000編の中のベスト3に入るのではないだろうかと思っている。誰も漠然と抱いている死への恐怖が取り払われたらいったい人はどうするであろうかというアイデアをうまくまとめている。

「おーい、でてこーい」

英語の教科書に取り上げられたのは、この作品だ。将来、起こりうるいろいろなゴミ処理の問題を星新一は、見事にショートショートに仕立て上げた。だが、そんな思想性はもちろん、微塵も感じさせない。

ついでに言うと、国語の教科書には、「繁栄の花」が採用された。

「ぼっこちゃん」

不愛想なロボット美女が、飲み客を相手に、オウム返しに答え、最後はだれもいなくなるという考えてみれば恐ろしい内容だった。

「鍵」

これは、名品である。これもラストのセリフ、「思い出したら持っている」が決まっている。一生かけて幸福を追求した主人公(だいたいエヌ氏とかエル氏など)は、お金に変えられない思い出を得たのだ。

「ごきげん保険」

ちょっと気に入らないことがあると、すぐに電話をかけて主人公は文句を言う。すると、電話の向こうの人が、「ごもっともです……」といつも、話し相手になってくれるのだ。ある日、「最近、気がついたのだが、白髪が増えてきた。これは政府の政策が悪いのだ」などと姿の見えない相手にあれこれ思いのたけをぶつける。相手は慣れたもので、「これだけは、申し訳ありませんが、昔から人間の老化は避けられません。しかし、それに合った金額をあなた様の口座に振り込むことで許していただけませんか」「よし、いいにしてやる」

最後のオチは、月末に支払う相当額の保険金にほかならないというウイットに富んだものだった。これなど、話し相手のいない高齢者にぴったりではないか。星新一は時代を先取りしていたのだと今になって思う傑作である。

星新一のこうした多くの作品は、生半可な批評家の批評を超えたところにある。昔、筒井康隆があとがきで述べていたことが思い出された。簡単に批評されるような作家ではないのだ。

さて、クラークは自伝『楽園の日々』で自分のことを語り、アシモフも自伝『アシモフ自伝』で自分の過去を詳細に述べた。尿管結石になったことまで書かれていた。小松左京も『SFへの遺言』で氏の自伝のようなものを書いた。

星新一だけは、書かずに終わったが、死後、別の人が自伝を書いた。その人は生前の星新一に会ったことがないと述べられていた。私には信じられなかった。まあ、そういうこともあるのだろう。

好きなSF作家を挙げよと言われれば、私は星新一をすぐにあげる。星新一には敵がいなかったと言われている。その人格と才能からであろうと思っている。

星新一の作品は膨大である。名作・傑作も数知れない。その中から、何作かを選ぶことなどもととできない。

また、思い出したら、続きを書くかもしれません。



## 福島正実『未踏の時代』

川瀬 広保

2017/05/09

SFマガジン初代編集長、福島正実の「未踏の時代」がSFマガジンに連載され始めて、SFがまだ日本にあまり根付かなかったころの様子がよく描かれていて、私は夢中になって読んだ。彼の書く文は名文と言っていいたい。表現力が豊かという簡単な言葉ではない。なかなかあんなふうには書けない。数々の訳文も彼の訳だからこそ、名訳として原文の雰囲気がよくわかって、夢中になって読んだ。「幼年期の終り」「夏への扉」等々である。夏への扉では、献辞にすべてのaelurofieleにこの書を捧げるとあって、この英語が(病的に猫好き)という意味だと知り、またその逆のaelurophobiaという語も知った。この語は、(病的に猫嫌い)という意味である。また、主人公が、冷凍睡眠で未来へ行く前に、医者に腰に注射を打たれる場面で、例の英語の早口言葉、peter piper picked a peck of pickled peppersを言う部分など、ハインラインのストーリーテリングのうまさだけでなく、それを名訳にしたための福島正実という人のすばらしさは、どんどん膨らんでいった。

そのいわば、自叙伝(または、SFを社会に受け入れさせようとした戦いの本)であるこの「未踏の時代」は、後に一冊の単行本にまとめられ、またさらに後に文庫本に収められた。

私は、「思い出話」にも書いたが、大学生の時、厚かましくも手紙を出して、明治大学で講演会をしてくれないかとお願したことがあった。後に、断りの手紙が来て、逆にほっとしたのだが、この「未踏の時代」の中の数々のエピソードはどれも興味があり、まるでそのころがよみがえってくるように生き生きと読ませるものがある。

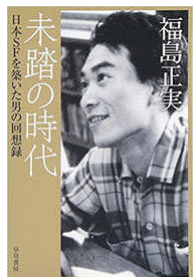
一介のファンであり、一読者でしか過ぎないが、3回ぐらいは読んだ。もし、まだ未読の方がいらっしゃったら、ぜひ読んでいただきたい。



『柴野拓美SF評論集(理性と自走性——黎明より)』

牧 眞司=編(東京創元社)

★★★★★すべてのSF人必読の一冊です！2014/5/19 川瀬 広保



これは、柴野さんの遺稿集だ。660ページもある分厚い一冊である。  
ほぼ2日で読み終えた。懐かしのあの日々がよみがえってくる。ページをめくれば、SFが熱かった時代の様子がまざまざとあらゆるページからよみがえる。SFファンであること自体が熱かった時代だった。



この分厚い本は柴野さんがSFに一生をかけたその履歴であり、またSFファンダム史でもある。この一冊の本の中にいろいろなものが詰まっている。

SFに関わった人たちがSFファンであった人たちがどのように活動したか当時の様子がまざまざと思い起こされる。懐かしの名前がいいたるところに出ている。

「宇宙塵」は出るべくして出た「芽」であったのだ。そして、その「芽」はやがて大輪の花として咲いたのである。

大学生だった私はSFファンジン「テラ」を出す、すぐに柴野さんのところへ送った。そして、「宇宙塵」でレビューしてもらったことがうれしかった。たとえ、数行の批評でもうれしくて、また次の号を出そうと努力したものだ。

この本はSF界の多くの人に読んでもらいたい。また、すでに過去を知っている人たちも再読する価値は十分にある。

柴野拓美という名はもっと評価されていい。この名前がなかったら、日本SF界は今のようにならなかったはずだ。作家は出ても、まとめる人がいなければ「SF」という分野は育たなかったであろう。氏の働きの手を替わりするような人はいなかった。この本が柴野拓美という名の再評価になることを望んでいる。

SFという分野はこれからもずっと続くはずだ。想像力というものがなくなる限り、SFは存続するだろう。

それにしても、柴野さんは博学だった。レビューを読むと今更ながら、そう思う。柴野さんにとって、翻訳は余技だったという伊藤典夫さんの言葉が思い出される。「宇宙塵」の発刊とその編集、膨大なレビュー、手紙などを書いたり、ファン大会へ出席したりするだけで精一杯なのに、小隅黎というペンネームでまた、膨大な翻訳をされ、その他の仕事もされたのだ。読みながら、そんなことを改めて感じた。

この貴重な一冊はSFに関わるすべての人におすすめである。

(Amazon レビューからの転載)



## 『ユナイテッド・ステイツ・オブ・ジャパン』

ピーター・トライアス(ハヤカワSFシリーズ)



USJは21世紀の「高い城の男」だ！ 2017/4/16 小島 義一郎

本書は第2次世界大戦に連合国が敗れ、アメリカ合衆国の東海岸をナチスドイツが、西海岸を日本が占領している世界を舞台にしている。そうです、P.K. ディックの『高い城の男』と同じ歴史改変SFなのです。

『高い城の男』は1960年代を想定して書かれているが、本書は日本統治下になって40年後が描かれている。このため、『高い城の男』では易経が出てきて何か東洋的で神秘的な雰囲気があるのに対して、本書では電卓(?)なる通信端末やバシフィックリムのような大型ロボット兵器が登場する。なにしろ日本軍は原爆まで持っているのである。そして『高い城の男』では連合国が勝つ小説が問題になるが、本書では連合国が勝つゲームが問題になる。その開発者を追跡するのが本書のメインストーリーである。

内容の紹介はこのくらいにして、本書には歴史的に事実ではない南京事件が記述されている。小説であるから許される問題ではなく、極めて微妙な問題だけに慎重な取り扱いを望む。

最後にTVドラマ『高い城の男』がAmazonビデオで閲覧できることを紹介しておく。

Website

TOP





# 明治大学SF研究会・OBの部屋



50周年記念大会を  
成功させよう！

＝更新履歴＝

- 6月12日 「本棚」を更新
- 6月12日 「会員だより」を更新
- 6月5日 「50周年」を削除
- 6月2日 「本棚」を更新
- 5月31日 「TERRA」を更新
- 5月30日 「思い出話」を更新
- 5月27日 「本棚」を更新
- 5月25日 「本棚」を更新

2017年6月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	



[明治大学SF研究会公式ホームページ](#)



ここではSF映画について熱く語りましょう

## SF映画が好きだ！

川瀬広保

2017/04/25



もの心ついて初めて見たSF(?)映画はたぶん「ゴジラ」だろう。「モスラ」だったかもしれない。小学生のころだったと思う。親に連れていってもらった。ゴジラは強くて、かっこよく、また怖くもあった。「モスラ」もだいたい同じような感じを持った。

それから、何十年も時間がたって、私にとってのSF映画の1位は、「2001年宇宙の旅」である。大学生だった私は、田舎の浜松では見られないその話題沸騰のSF映画を期待してみた。SF研創立のころだったと思う。立ち見だった。後半20分ぐらいが物議をかまして、「わけがわからない」と星新一などは酷評していた。肝心のキューブリックは、「この映画が一度でわかったら、われわれの意図は失敗だったことになる」と気にしない様子だった。

次に、「猿の惑星」を見た。こちらも立ち見で、最後の自由の女神像の有名な場面で「ここは地球だったのか！」というセリフが記憶に残る。館内に、どよめきが起った。もう一度、この話をしっかり把握しよう原作のビエール・プールの「猿の惑星」を買ってきて、ほとんど徹夜して一夜で読んだ。

最近のSF映画はどうなのだろう？退職後、毎日のようにレンタルしてきて、SF、またはその周囲の映画をたくさん見た。

以下、順不同で、一言感想とともに、列挙してみる

「ミスト」 おどろおどしいところがいい。

「2010」 最初の部分、主人公がロシア人の科学者とやりとりする場面が面白い。字幕と英語を何回も比較してた。「2001年宇宙の旅」と違って、これはわかりやすかった。

「スペースヴァンパイア」 この映画は深く考えさせものを持っている。スペースヴァンパイアの何とすごいエネルギーか。

「タイムマシン」 さすがは、ウェルズの名作。ただ、古い映画は画質的にも、あまり見られないのだが・・・

「宇宙戦争」 同じようなことが言えるが、どちらも、最初の頭の中にあるイメージはどこまでも残るものだ。リメイクがいいとは限らない。「猿の惑星」でも言える。

「火星の人」 アメリカ人の宇宙飛行士が火星の砂の中に、パスファインダーを見つけるところは、心憎い。

「ゼログラヴィティー」 宇宙空間で生き抜くことは、大変なことだということをこれでもかとも知らせてくれる。

「コクーン」 この映画には若者はあまり出てこない。いい映画だ。続編もよかった。

宇宙人の心が温かい。

「エイリアン」続編が作られるたびに、だんだんエイリアンがすくなくなっていく。それに立ち向かう女主人公は力強い。

「リアルスチール」 少年が主人公になっていて、ポンコツロボットにも、負けん気があると見せてくれる。

「アポロ18」 宇宙計画は成功とばかり言えないところが、怖い。これが現実なのかも。

「運命のボタン」賛否がわかる問題映画だ。何回も見た。運命とは何なのか、考えさせられる

とりあえず、こんなところですか。思いついたらまた今度。

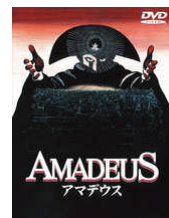
最近、映画もあまり見なくなって、映画館にも足を運ばない。映画化してほしいSFは、私にとって、やはり、「幼年期の終り」「銀河帝国の崩壊」である。



## SF映画が好きだ！(その2)

川瀬広保

2017/04/28



これまでに見たSF映画と一言感想を並べてみた。順不同です。

「ソイレントグリーン」

だいぶ古いですが、ハリウッドのSFを映画化したものである。未来では、食べものが不足し、動物性たんぱく質は、清掃車によってかき集められる人間だったという衝撃的な内容である。70歳になったら、ペーターベンの「田園」を

聞きながら、本人の希望で安楽死させられ、その体はベルトコンベアーに乗せられて、若い人の「食料」になるのだ。もしかして、まだこれから十分ありうる未来かもしれない。

「スター・マン」

この「宇宙で知性があるのに、野蛮なのはあんたらだけだ」という宇宙人の言葉がこの映画製作者の主張をよく表していた。

「プレデター」

この映画の捕食者がすごい！エイリアンも負けてしまうのではと思わされる。光も曲げられるので、どこから襲い掛かってくるかわからない。そのうち、エイリアンとプレデターの一騎打ちの映画も作られたが、どっちが勝ったのだろう。この映画にはどんな思想があるのだろうなどと考えなくてもすむ映画だ。

「ファンタジア」

SFとは言えないかもしれない。SF大会で見た。セリフなしで、音楽とアニメーションが見事に一致していて素晴らしい。セリフがなくても、アニメとそのバックに流れるクラシック音楽を楽しめばいい。

「ジュラシックパーク」

恐竜映画がとてリアルで、追いかけられる人間はまさに食われるようだ。恐竜を現代にのみがえらせようとした人間が悪いのだ。そして、アミューズメントパークを作ろうとして、一攫千金を狙った人間が…。ただの恐竜映画ではないような気がする。

「ヒドウン」

何かが隠れている。宇宙から来た生命がこの地球に隠れているというひと時、よくあったアイディアのSF映画。あなたの隣にもと思うと怖い。

「ゼイリブ」

これもその手の一つ。「ゼイ・リヴ」ぐらいのタイトルにしてほしかった。このカタカナタイトルでは、They live...を連想しにくい。

SFではないが、永遠の名画として、お勧めの一番は

「アマテウス」である。

これは、モーツァルトの一生をサリエリの視点から描いている。音楽神ミュースの子、モーツァルトは35歳という短命の中で、700曲もの傑作を書き続け、その才能はだれもが認めるところだった。一方、サリエリは70歳で精神病院に入れられ、自殺を図る。モーツァルトの曲は、没後、いつまでも演奏され、輝きが衰えることはない。

サリエリの書いた曲は、凡庸で、消えていく。この映画は何回も見た。英語字幕で見たり、日本語で見たりした。こういう映画を傑作というのだろう。人の才能をうらやんではいけないということがよくわかる。

最後の場面で、自分を神だと思っている(?)サリエリが、I observe you.と言う(そう聞こえた)のだが、それがI absolve you.であることになかなか気づかなかった。発音がどうしても、observe(聞こえ、absolveという語は知らなかったし、あとで「赦す」という特別な語であることがわかった。「私(神)は(お前の凡庸さ)を赦そう」ということであることが、やっとわかった。

それにしても、古い映画ばかりだ。もっと新しいのについて書きたい。もしかしら、その3があるかも。



## なんでDVDにならないのか？

小島 義一郎

2017/04/22

昔VHS版で販売されていたのに、DVD(あるいはBD)で未だに発売されていない映画作品がある。発売元はもちろん経済的理由で販売をとどまっているのだろうが、DVD未発売の名作(迷作?)も多い。その名作を観たくても、今さらVHSの画質に満足できるわけもなく、そもそもVTRの機械がなく、観賞を諦めざるをえない。

SF映画の中にも、前途のような不遇な作品が多く、どうしても観たい作品がある。私の場合、仕方がなく海外版を購入して観賞している。輸入版を購入するときに注意しなければならないのが、リージョンコードだ。このため、通常のDVDプレイヤーなどでは再生ができず、PCなどで観賞しなくてはならない。また、当然日本語の字幕はないので、できれば英語の字幕があることが望ましい。私のような英語が不得手の人の場合、耳で聞いてわからなくても、英語の字幕が出れば理解できる。あまり難しい会話はないから、それほど心配はいらないが。

このような理由で購入したSF作品を3点紹介する。円高のときに購入しておいて良かった。

### 1) 何かが道をやってくる(R. ブラッドベリ)

ご存じブラッドベリのSFファンタジーで、SF研の読書会で課題図書だった。確か第2回読書会で、討論テーマは「SFに科学は必要か？」のような記憶がある。初めて生田キャンパスで開催されたので、よく覚えている。(ちなみに第3回読書会は「ドウエル教授の首」でテーマは「SFにおけるSensationalismは不可欠か」である)

この作品もVHS版は発売されていたが、DVDは未発売である。ウォルト・デズニー作品であるから発売してもよいと思うが残念です。映画は原作の幻想的な雰囲気がよく出ている佳作と思うのですが。

### 2) 地獄のハイウェイ(R.ゼラズニイ)

この作品は「世界が燃え尽きる日」の題名でVHSが発売されていた。一時、日本版のDVDが発売されるような話があり、輸入版を購入した身には「しまった」と思った。しかし、現在でも発売されておらず、Amazonの検索でも出てこない。

よくある核戦争後のサバイバル小説で、孤立した主人公たちが最後は人類生き残りのコミュニティに辿り着く話である。主人公たちが乗る「ランドマスター」なる車が活躍し、印象に残る作品である。サンリオの化粧品などが登場するが、70年代の特撮なので出来はお察しください。

この作品がSFMIに掲載されたころは、ゼラズニイを初め、ディレニイやシルバーバーグなどの作家が日本に紹介されて、SF界全体が活況を呈していました。

### 3) 刺青の男(R. ブラッドベリ)

この作品も同名のタイトルでVHSが発売されていた。名作なのに何故DVDで発売しないのか疑問です。記憶が確かではないが、この作品はSF研の映画観賞会で観たのではないのでしょうか。映画では刺青から導かれる話が3話あり、原作では全く印象に残らなかった「長雨」が良かったと思います。主人公役のR. スタイガーが好きなので、手元に置きたい作品です。



## 原作はいいんだけど～映画はちょっと (GWに家で観たSF映画)

小島 義一郎

2017/05/06

表題のようなSF映画を5本紹介したい。もっとも私はDVDを購入して観ただけで、映画館では観ていない。そもそも映画館で上映したのかわからない。これらの作品の多くはレンタル店にも置いていない場合が多く、DVDを購入するしか鑑賞できない。このためこれらの作品紹介も無駄ではないかもしれない。

映画の「ネタばらし」につながる批評ではなく、あくまで紹介です。

### 1) 少年と犬

ハーラン・エリソン原作の破滅テーマSFで、核戦争後のサバイバルを描く。カルトムービーと云われているが、粒子が粗く低予算のB級映画である。

### 2) リバーワールド

フィリップ・P・ファーマーの原作で、人類が絶滅後、全人類がある惑星の大きな川のほとりに復活する。最後に川を渡る冒険へと旅立つが、話が中途半端である。

### 3) ナイトフォール(夜来たる)

アイザック・アシモフ原作で、千年に一度夜が訪れる惑星エーオンの物語である。宗教と科学の対立がメインストーリーであるが、映像全体に迫力不足。この惑星はインドか。

### 4) サウンド・オブ・サンダー

レイ・ブラッドベリ原作の時間テーマSFで、事故による時間改変ものである。かなり予算をかけた映画で、特撮もなかなかよく出来ている。時間の波など疑問が残るが。

### 5) 火星年代記

レイ・ブラッドベリの名作で映画化不可能と思われるが、何とロック・ハドソン主演のTVシリーズである。宇宙船などがチープであるが、それもある意味ブラッドベリ的で味がある。







# 明治大学SF研究会・OBの部屋



50周年記念大会を  
成功させよう！



ここではSF漫画について熱く語りましょう

## 私が好きな漫画家

川瀬 広保

2017/05/13



私が好きな漫画家は何と言っても、まず手塚治虫である。  
「鉄腕アトム」は実に懐かしい。アトムが太陽に向かって、飛び込んでいくラストシーンを見て、子供心にどうなるんだろうとハラハラした。アトムは死んでしまうだろうか。ところが、作者はちゃんと考えてくれた。アトムは決して太陽の熱で溶けきってしまうことはなかった。  
私が小学生のころ読んだ。漫画読書体験の走りと言えば、きっとそうだ。

次に、好きな漫画家は何と言っても、「ドラえもん」の作者、藤子不二雄である。後に、藤子・F・不二雄と藤子不二雄Aに分かれる前の藤子不二雄である。

ここでは、その作者、藤子不二雄の漫画自叙伝エッセイともいべき、または青春グラフィティである「まんが道」を取り上げたい。私はこの漫画を夢中になって読んだ。描く方は大変だが、読むのはあっという間だった。藤子不二雄の二人が本物の手塚治虫に会いに行く話は、どの分野にも先人がいて、そういう人たちはみな、才能を与えられた天才である。その天才でさえ、昼夜を惜しまず、努力しているのだということを知って、二人は衝撃を受ける。

この「まんが道」は気楽に読めるが、奥は深い。締め切りをみな落としてしまっただけでなく、プラス面だけでなく、マイナス面も本当に良く描かれていて、いろいろ考えさせられるものを持っている。その事件以来、締め切りは必ず守るようになったのだ。

次に「ドラえもん」について述べ出すと、きりがなくなる。昔、私がまだ「ドラえもん」を知らなかったころ、そのころ勤めていたある学校のある生徒に教わったのだ。そのころ、班ノートというのがあって、何を書いてもいいそのノートにその生徒が「ドラえもんが好きです」と書いてきたので、まだ何も知らなかった私は「ただのフィクションでしょ？」と書いていたら、翌日、長文の反論が返ってきた！私は、すぐに一冊390円の「ドラえもん」を毎回、2巻ずつ買ってきてすぐに読み始め、こんなに面白く、夢とアイデアに富んだ漫画はないと初めて知ったものである。

もう50年近い昔の話であるが、これだけはよく覚えている。「ドラえもん」との出会いはその生徒を通じてというわけだ。卒業の時、またその生徒から例の班ノートを記念にいただいた。別の学校でも、ドラえもんのぬいぐるみをいただいたりしたものだ。

「ドラえもん」に出てくる数々の機械(ガジェット)はそのうち近い未来に実現するだろうと真剣に考えている人もいるらしい。読者はアジアを中心に億単位の人がいるというから、すごい！

そうだ、思い出した。「藤子・F・不二雄記念ミュージアム」に行ったことがある。原画のコピーなどを買ってきた。こもすごい人気だった。

手塚治虫では、「火の鳥」「ブッダ」など、藤子不二雄Aでは、「笑うせえるすまん」「愛・・・しりそめし頃に・・・」などまだまだ書きたい作品が多い。  
いずれ、また。



## 大友克洋の「大砲の街」がいいなあ

小島 義一郎

2017/05/12



「大砲の街」は、大友克洋のアニメ短編集「MEMORIES」の第3話である。大小無数の大砲を装備した都市で、大砲を撃つだけの生活をおくる住民の話である。そこに暮らす一家の一日を、独特の絵柄で描いている。

22分余りの短編アニメであるが、初めから終わりまでカメラの切り替えがないワンショットがすごい。また架空の話ながら、非常にリアルで凝った世界観と東欧風の絵柄・色彩が素晴らしい。

戦争や総力戦への批判が描かれているとの感想もみられるが、「ショート・ピース」などに繋がる、大友が目指すアニメの実験作と考えた方が良さそう。こんな作品が1995年に製作されていたとは。

＝更新履歴＝

6月12日	「本棚」を更新
6月12日	「会員だより」を更新
6月5日	「50周年」を削除
6月2日	「本棚」を更新
5月31日	「TERRA」を更新
5月30日	「思い出話」を更新
5月27日	「本棚」を更新
5月25日	「本棚」を更新

2017年6月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	



[明治大学SF研究会公式ホームページ](#)



# 明治大学SF研究会・OBの部屋



50周年記念大会を  
成功させよう！



ここではOB会員の日ごろの様子を語ってもらいます

=更新履歴=	
6月12日	「本棚」を更新
6月12日	「会員だより」を更新
6月5日	「50周年」を削除
6月2日	「本棚」を更新
5月31日	「TERRA」を更新
5月30日	「思い出話」を更新
5月27日	「本棚」を更新
5月25日	「本棚」を更新

2017年6月											
日	月	火	水	木	金	土					
			1	2	3						
4	5	6	7	8	9	10					
11	12	13	14	15	16	17					
18	19	20	21	22	23	24					
25	26	27	28	29	30						



[明治大学SF研究会公式ホームページ](#)

## あれから50年(思い出三題)

小島 義一郎

2017/06/12



■SFMIに連載されていた「SFスキナー」で、多くの言葉を教えられた。「エコロジー」なる言葉もこのコラムで初めて目にした。どこかにある究極のエコ社会を描いたユートピア小説の紹介であったような気がする。「ボルノグラフィ」と言う言葉もこのコラムで知った。フィリップ・P・ファーマーのSF小説の紹介で、この作家はSFの他に「ボルノグラフィ」も書いていると述べられていた。何か不思議な語感のする言葉だった。今では「エコ」や「ボルノ」は当たり前のように使われているが、当時は新鮮な言葉だった。

■新しい波New Waveが一時SF界を席卷した。この頃、あらゆる分野で既製概念を否定するアンチ○○の潮流があった。M・ムアコックが「ニューワールズ」の編集長になり、H・エリソンが「危険なヴィジョン」を編み、J・メルルが「年間SF傑作選」を編んだ。日本でも遅ればせながら、山野浩一氏が中心になって「NW-SF」なるSF雑誌を創刊するとの情報があった。私は部員全員からこの雑誌の注文を受けて、まとめて購入すべく山野浩一氏宅に向かった。山野浩一氏の「X電車で行く」などの作品は読んだことがあったが、SF作家よりも競走馬の血統研究者として一般に知られていた。お茶をご馳走してくれながら、しばらく話したが、内容はよく覚えていない。ただ山野氏の好きな作家はオールディスであったこと、新しい雑誌に創作を書いてくれとときに誘われたことを憶えている。

■SFマガジンに掲載された短編で何が記憶に残っているだろうか。アンソロジーなどには、名作とされる「冷たい方程式」などがまず選ばれるのだろう。しかし、アンソロジーなどに選ばれないが、なぜか記憶に残る作品もある。私の場合、「バケツ一杯の空気」(F.ライバー/SFM105)、「グランドセントラル駅」(L.ジラード/SFM114)などが何故か記憶に残っている。また、SFM125の新しい波特集で、「リスの檻」(T.M.ディッシュ)と「宇宙の熱死」(P.ゾーレン)が印象深い。日本人作家では筒井康隆——このHPでまだ取り上げられていない！——の短編が記憶に残っている。「お紺昇天」、「墮地獄仏法」、「マグロマル」などで、短編集で読んだのかもしれない。

## ミステリーゾーンをYouTubeで観る

小島 義一郎

2017/05/05



中高生のころ観ていたTVドラマ「ミステリーゾーン」がYouTubeで観れるようになったのは、いつの頃だろうか。会社を辞めてPCでネットをよく観るようになってから、YouTubeで昔のTVドラマが観れるのを知った。「逃亡者」や「拳銃無宿」などを懐かしんでよく観た。

白黒で画質が悪いが、放映時のTVの画質よりは良いくらいだ。そしてなんと云っても「ミステリーゾーン」である。SFなんて全く知らないころだったから、こんな話があるのかと驚いたことが多かった。何より怖い話が多く、不思議な感覚にさせる作品が多かった。

YouTubeには156本の作品とイントロがアップされているが、残念ながら日本放映版ではない。しかし、サブタイトルボタンを押せば英語字幕(ひどい音声認識だが)が出るのでなんとか内容はわかる。また作品ごとの内容を説明をしたサイトもあるので、参考にすることができる。

多くの作品の中から内容を覚えている5本を選んで、なぜ覚えていたのか考えながら各作品の紹介をしてみよう。

### 1)「幻の砂丘」A Hundred Yards Over the Rim / S02E23

何故この作品を覚えていたのかわからない。開拓時代の男が砂漠で突然現代に現れ、トラックをけけ物と呼ぶあたりの記憶がある。今では時空の歪とか言いそうだが、当時不思議な感覚になった覚えがある。クリフ・ロバートソンが出演しているが、もちろん「まごころを君に」のチャーリーであり、「魚雷艇109」のケネディ艇長である。アメリカでの初放映は1961年4月7日である。

### 2)「火星人は誰だ？」Will the Real Martian Please Stand Up / S02E28

この話はよく覚えてなかった。最後に火星人が三本の手を出し、金星人が三つ目を出すのが面白いのだが、このシーンはよく覚えてなかった。それ以外の乗客の怪しさの方が覚えている。最後はこの時代ならではのオチなのだろう。アメリカでの初放映は1961年5月26日である。

### 3)「人類に供す」To Serve Man / S03E24

5作の中で一番好きな作品であり、怖かった記憶がある。よくある侵略テーマなのであるが、「供す」の意味を考える